




## 審査結果の要旨

報告番号	乙 第 <b>2831</b> 号	氏名	王丸 陽光
審査担当者	主査 矢野 博之  副主査 中村 桂一郎  副主査 名嘉真武国 		
主論文題目： 先天性色素性母斑に対するレーザー複合療法の臨床効果と組織学的効果の検討			

### 審査結果の要旨 (意見)

先天性色素性母斑 (CMN) は、外科的治療が従来最も一般的である。本研究では、CMN の新規治療法としてレーザー複合療法 (CLT) の有用性を検討している。7 例の CMN に対し、CLT を実施して、6 ヶ月以上後に治療効果を、臨床的 (色素改善の評価、合併症の有無) 及び病理組織学的 (皮膚生検組織の評価) に検討し、母斑細胞が真皮内に優位に存在するタイプあるいは真皮内だけに存在するタイプの CMN では治療効果が高い事や CLT による皮膚の組織学的変化を初めて明らかにしている。本研究では、CMN 症例の CLT の適応条件や CLT の実際の治療方法などを明らかにしており、CMN 患者に新しい治療法の選択を可能とした重要な研究であり、学位論文として極めて価値の高いものであると判断する。

### 論文要旨

先天性色素性母斑(CMN)の治療において、外科的治療が第一選択となるが、整容的や機能的な後遺症を生ずるため、近年ではレーザー複合療法(CLT)が行われている。しかし CLT に抵抗性の CMN も存在し、その要因については不明である。今回、臨床効果と組織学的効果を比較しその要因について検討した。対象は CMN 7 例で、方法は CLT 前に皮膚生検を施行し CMN の組織型診断を行った。CLT の方法は、ノーマルルビーレーザー照射後に表皮剥離させて Q スイッチルビーレーザーを照射した。治療後に臨床効果として色調改善と合併症の有無の評価を行い、皮膚生検にて組織学的効果の検討も行った。結果は、メラニン産生母斑細胞が主として真皮内にある真皮内型と複合型の真皮内優勢型では治療効果が得られ、その細胞が表皮と真皮の境界部にある境界型と複合型の境界部優勢型では治療効果が得られなかった。また、全例で合併症は認めなかった。CLT に抵抗性である要因は、残存したメラニン産生母斑細胞が表皮と真皮の境界部で起こる活性化により再増殖すると考えられた。現段階での CLT の適応は、真皮内型と複合型の真皮内優勢型であり、また境界型と複合型の境界部優勢型は適応とならず、外科的手術を考慮する必要があると考えられる。